

松下幸之助記念志財団 研究助成

## 研究報告

(MS Word)

【氏名】藤澤綾乃

【所属】(助成決定時) 東京文化財研究所文化遺産国際協力センター

(現在) お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所(特別研究員)、古代オリエント博物館(共同研究員)、慶應義塾大学文学部(非常勤講師)

【研究題目】

古代末期の環地中海地域における「異教」の後退過程

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、古代末期の環地中海地域において宗教的多数派から少数派へと移り変わった、古来の伝統諸宗教(いわゆる「異教」)の後退過程を探り出すことである。当該期は、313年のミラノ勅令公布を機にキリスト教が政治的台頭を果たした宗教転換期であり、その後は20世紀後半頃までキリスト教的価値観に基づいた歴史展開が欧州の文献学では主流であった。一方、考古学的にはキリスト教興隆後の時代においても異教関連の資料が確認され、事例研究が盛んに行われている。その成果によって、近年は「一神教対多神教」といったような二項対立関係で捉えられる歴史観からの脱却を目指す学際的な研究が活発になされている。たとえば、イスラエルはユダヤ教とキリスト教の双方の聖地であることから、両者の関係性に関する研究は古くから盛んであり、最近では異教との関係性も検討されている。本研究は、そうした海外の研究成果を活用しつつ環地中海地域全体を見渡す比較研究を行いたい。

【研究の内容・方法】(800字程度)

古代ローマ帝国は多神教中心の社会であったため、ユダヤ教やキリスト教といった一神教信仰者は宗教的には表立って活動できる立場にはなかった。しかし、313年のミラノ勅令公布によって信仰の自由が認められ、とりわけキリスト教は帝国の強い後ろ盾によって組織化されていった。文献史料からは、キリスト教皇帝やそれを支持する地域住民による異教神殿の破壊事例が確認されている。しかし考古資料を見る限り、異教の後退はキリスト教側の人為的な圧力によるものに限定されない。たとえば、災害による自然的破壊や荒廃によって遺棄された異教神殿も多く存在する。学問的性質上、考古学は遺構の廃絶年代やその過程を検討するために有用であることから、本研究は文献史料と考古資料の双方を用いつつ、遺構データの集積を試みる。その上で、環地中海地域における異教の後退過程を比較検討する。

本研究は、①データベースの作成と分類、②現地調査、③先の2つを踏まえた比較検討の三段階で構成される。本年は、①および②を中心に進める。まず①については、現在までに行われた発掘調査の報告書を手がかりとし、環地中海地域においてイスラーム台頭期まで残存した異教神殿遺構の分布図とデータベースを作成する。つづいて②については、発掘調査報告書の情報収集を踏まえ、調査成果が明らかにされている遺跡(ないし関連研究所)へ赴き、より最新かつ正確な考古資料データを収集する。なお、現地調査は、博士論文で扱ったイスラエル/パレスチナを起点とする。訪問先では2つのことを行う。1つは、発掘調査報告書の閲覧及び収集である。報告書を頼りに、神殿遺構の出土状況を確認し、発掘調査がどのように進められてきたのか把握することを目標とする。もう1つは、神殿遺構と周辺環境との関係性に関する巡見調査である。

【結論・考察】(400字程度)

①については、異教神殿遺構の分布図に他の宗教遺構も織り交ぜた資料を作成することを目指した。その結果、現イスラエルの北部(部分的にレバノン南部)ではユダヤ教・キリスト教・それ以外の諸宗教(すなわち「異教」)の宗教遺構が、それぞれある程度のまとまりをもって存在したことが明らかになった。つまり、当該

期においては、様々な宗教が複雑に絡み合う一方で、「すみわけ」がなされていたということである。その状況について確認をすべく、②の現地調査を行った。

現地調査は10日間行い、まずイスラエル南部ネゲヴ砂漠の遺跡を複数訪問した。さらに、ユダヤ教のシナゴーク、キリスト教の教会堂、異教の神殿が多く発見されているヘブロン南部の地域の巡見を行った。異教神殿については現存していないため確認が出来なかったが、その地域一帯の地理条件や複数の宗教が折り重なる環境の土壌を確認することができた。またこの地域一帯は、のちにイスラームの影響を受けてモスクが建てられていったため、極めて宗教的多様性に富んだ地域であったことについて、現地の考古学者と意見を交わすことができた。調査後半では、イスラエル北部を訪問し、①で得られた考察について現地の考古学者の意見を受け、助言を賜った。複数の宗教に関する考古資料を同時代的に扱う研究は、イスラエル／パレスチナでも十分になされているとは言えず、研究の意義と余地が大いに残されているということを追認した。